§0-1.
緒言

ある人の顔について言葉で伝えようとする。目は大きく、丸く、鼻筋は通っていて、眉は比較的角度があって細め。面長でやわらかい印象。

このように、顔に関する情報は形態的な特徴やそこから得られる雰囲気を以って伝えられる場合が多い。大抵の場合はその人物の性別が先に伝えられているが、前述のような情報が得られた際、その人物の性別をどのように判断するであろうか。

また逆に、先の情報が与えられた上で、「その人は男性です」と教えられた場合と、「その人は女性です」という言葉が加えられた場合とを想像してみて頂きたい。想像される顔は全く同じものであろうか。否、何らかの違いが生じている筈である。

男女の表象の在り様、そして男女の表象の違いの存在の一端はこうしたことから探ることも可能であろう。言葉を通じて想起される像は、いわば典型として保存されている男女の像を示唆するものと捉えられる。顔に関する情報が性別という枠組みにおいても整理されていることが容易に想像できる。

では、冒頭の情報に「色白」という言葉が付け加えられた場合はどうであろうか。それまで不安定だった人物像が「色白」という言葉一つで女性としての安定性を増してくるということはなかろうか。安定はしなくとも、想起される像は女性方向に傾くように思われる。つまり、女性を示す信号として色白が作用している可能性が考えられるのである。

本研究ではこの視覚される男女の顔に着目し、その中でも肌色に焦点を当てる。何故なら、肌色には価値が付加されているからである。特に女性の白い肌に対しては絶対的な価値が見出される。「色の白いは七難隠す」という言い回しはもとより、昨今の「美白」という言葉の浸透、美白化粧品市場の急速な伸びにもその片鱗を窺うことができよう。その何れの矛先も女性に向けられているというところに社会的に作り出されたジェンダーの偏向を感じずにはいられない。

観察者、見る側である我々の目が社会的に規定されたものであるとするならば、その目とはどの段階でその「社会性」を呈するのであろうか。「男性は色黒、女性は色白」という価値観を他者の評価において発揮するだけであろうか。それとも、それ以前の段階、例えば顔を認知するという段階においてさえ、既にそうした「価値観」に基づいた修正がなされているのであろうか。